

随 想

奥出雲に「たたら吹き」の里を訪ねて

(株)フジコー 特別技術顧問

堀川 一男

Kazuo Horikawa



当社の主要製品であるC.P.Cロールは中国地方にある山陽工場で製造しているが、中国山脈地帯ではわが国に近代製鉄法が導入される迄の永い間、武器や農機具或いは建築用金物等の鉄を造るために「たたら吹き」が盛んに行われていた。現在でも島根県にはわが国唯一の「たたら吹き」の遺跡があり操業も伝承されているので、日頃同じ地方で鉄関係の仕事をしている者として是非一度は視ておきたいということになり、社長のお勧めもあって、山陽工場の工場長以下5名の幹部技術者達と平成7年11月17日の朝、島根県飯石郡の吉田村字菅谷を目指して出発した。鴨方の工場から福山、三次を経て掛合から右折して山道へ踏み入った。幸い快晴で空は碧く空気は澄み、山々は紅葉して錦織の様に綺麗だった。四囲を中国山地特有の500~600mのなだらかな山々に囲まれた海拔約300mの山間には、「やまたのおろち」の故事や「金屋子神」が白鷺に乗って此の地の桂の木に飛来した伝説などが息づいている。古くから鉄生産の歴史と共に歩み、かつてはたたら火が此処彼処に燃え上がっていたのであろう。今でもたたら師の子孫が生存する集落の「山内」や、国が指定した唯一の「菅谷たたら(国指定重要有形民族資料)」があって、村そのものが生きながらの博物館である。

先ず「鉄の歴史村地域振興事業団」の事務所に坂本事務局長を訪ねて説明を聴いた。近くの横田には日刀保(日本美術刀剣保存協会)が全国の日本刀製作者向けの材料を一元的に確保するために文化庁の補助金を受けて毎年1月中旬から2月の中旬にかけて4回操業している(株)鳥上木炭銑工場のたたらがあるが、菅谷のたたらは鉄の歴史村地域振興事業団が

村おこしの目的で毎年11月から3月にかけて2~3回吹いて操業や用途の研究を行っている。横田の一代(一回の操業)が昔ながらの3昼夜なのに対してこちらは約30時間と短く、炉もやや小さい。炉は水分を嫌うので土を深く掘ってビニールシートを敷き、その上に厚さ70cmの乾燥した砂と10cmのカーボン煉瓦を積み重ね、更に木炭灰30cmを搗固している。炉の外殻には耐熱鑄鉄製の型の内側に耐火キャストブルを裏張りしたケースを用いており、粘土質の土と砂質の土を混ぜて築炉し、1カ月間乾燥させる。羽口は左右に4本ずつあり、「ふいご」はモーターによる連続送風で代用している。今朝7時に「火入れ」をしたので「鉚出し」は明日の午後になる。今回はNHKの取材班と静岡理工科大学の調査チームも来ているとお話だった。早速裏手の小高い丘の上にある高殿(工場)の現場に案内して貰った。一步踏み込むと薄暗い屋内の真中に長さ2m、幅1m、高さ1.2mほどの炉があって赤々と炎が立ち上がりゆらめいている。此れこそ錬金術の火である。屋内は炎の発する煙と舞い上がる床の土や炭の微塵が立ちこめ、鑄鉄工場特有の臭気が鼻をつく。壁に沿った隅には作業員の詰所、原料の砂鉄や木炭或いは道具類の置場などがある。「ふいご」の代わりに送風機だけが近代を感じさせる。やがて、炎を食い入る様に観ていた若い白井康裕「村下」(技師長)らは緊張した面持ちで木製の平らなシャベルで砂鉄20kgを静かに炉内の炎にふりかけ、次いでその上に竹製の箕で木炭を装入する。これを約40分毎に繰返し、時々自然木の先に金具を付けた棒でノロ穴をつついて炉内の状況をうかがっている。

